
中外雑記

神社界

震災で直会はささやかに

●明治神宮（外山勝志宮司、東京都渋谷区代々木神園町）は十七日、天地の神々にこの秋の豊作を祈る伝統行事・祈年祭を執り行なった。晴天に恵まれたものの冷たい風が吹く寒い日となった当日、役員総代、農林水産業関係者など多数が参列。儀式は、四人の巫女の舞が奉納されるなど古式に則って行なわれ、午前十一時すぎに終了した。この後の参集殿での直会では、外山宮司が「稲の魂を食べることによって人間の命が活かされております。そこに感謝するのが秋の新嘗祭。祈年祭は農林水産業と深い関わりを持つものですが、今日は商業、工業も含めてお祈りしました。今年は兵庫県南部地震がありましたので、ささやかな直会だけにさせていただきました」と挨拶。兵庫県南部地震に鑑み、毎年行なわれる祈年祭に関する講演や、神楽太鼓などの清興が中止され、昼食会のみが開かれた。

天台

寂庵でもバザー

▽京都の嵯峨野寂庵（瀬戸内寂聴住職）で、十五日午後一時から、震災義援金を呼びかけるチャリティーバザーが開かれた。信者の人々が品々を持ち寄り、狭い境内には門前に列ができるほどで、夕方まで賑わった。瀬戸内寂聴さんも書画や数々の贈り物など山積みして参加し、「有り難う、有り難う」を繰り返していた。

浄土

加藤教授が一宮町へ

▽加藤達成佛大教授（京都教区田辺町の極楽寺住職）は二十日、兵庫県南部地震の震源地である淡路島の一宮町へ、救援物資の学用品などを持参して同町教育委員会を見舞ったほか、町内の山田小学校で三年生の授業を行ない激励した。二十五人の児童に書道を教えたが、子どもたちは臨時の授業に大喜びで、活発な質問が飛び出し、児童の作品は添削のため近いうちに送られてくる由。

真言

炊き出しは献立にも配慮

●**高野山** 淡路島では、宗務所、寺族婦人会、青年教師会、各仏教会などの単位で地震被災者のためのボランティア活動を行なっている。二十四日も寺族婦人会と淡路島内寺院によるボランティアが一宮町の公民館など六カ所で、おでんとおにぎり六百人分の炊き出しを行なった

▽関係者の話によると、淡路島と神戸では様々な点で事情が異なるようだ。淡路の場合は若者が神戸や大阪等に働きに出ているため、今回被災した高齢者の割合が神戸等に比べ高かったようだ。家を建て直す余力がない人も多く、なお復興までかなりの時間を要するとみられている

▽また、昼間は多くの一般ボランティアがいるが、夕方になると帰る人もかなりいて、夕食を賄うのはどうしても町の職員になりがちという。そんな背景もあり、寺院関係のボランティアはなるべく夕食の炊き出しをするようになっている。献立も地震直後はとにかく生きるための食事という面が強かったが、落ち着いてきた今は同じ献立が続かないよう事前に計画され、今後はより家庭的なものや栄養のバランスなどにも配慮が必要になると予想される。

仏の使命と受け取り進む

●**御室派** 兵庫県南部地震で本堂と庫裡が全壊した神戸市長田区東尻池町二ノ一ノ一〇、法隆寺の粟生英憲住職は、災害にもめげず、住職として先頭にたって寺族と共に作業を続け、全壊の建物をすっかり自力で撤去した。本尊はじめ、荘厳具のほとんども全壊の中から取り出し、法衣も取り出されたのは、不幸中の幸いであった。粟生住職は鳥取県出身。小学校時代に鳥取地震に遭遇。お寺は全壊に近く、ずっと地震の後始末で育っている。高野山大学を卒業後、縁あって神戸・法隆寺に入寺はしたが、同寺は戦災で丸焼けからのバラック住まいで、復興が課せられていた。粟生住職は「今回の震災も確かにショックでしたが、地震に二回遭い、続いて戦災と復興のために生まれてきたような人生と思えば、苦にならない。仏の使命と受け取って素直に進むしかありません。全壊した建物のことをすっかり忘れて、新しい本堂の建築へ意欲を燃やしております。隣接の会社が駐車場として使っていた土地が、地震のためきれいな形で入手できましたのも、災いをして福に転じられました」と

▽粟生住職は二十四日に開会された定期宗会で元気な顔を見せ、同僚議員や内局、宗務所職員らを安心させていた。同住職は宗会前日の議員懇談会から出席し、「過去をくよくよ振り返っても仕様がありません。前を向いて進みます」と、はっきりとした口調で語っていた。

法華

対策本部を常設機関に

●**日蓮宗** 既報のように、兵庫県南部地震に寄せられた義援金は、二十一日現在までに一億三千万円を超えたが、これは、先に開かれた七百五十年慶讃事業に関する宗務所長懇談会（一月三十一日と二月一日の二日間）の席上、自らも被災した大塚泰詮兵庫県東部宗務所長（近畿教区長＝一日付で兵庫県南部地震日蓮宗近畿対策本部長に就任）から生々しい現地の声を聞いて帰った各所長が、それぞれの地元で縷々説明したことが大きな盛り上がりとなっているようで、「対策本部」でも「毎日、うなぎ上りで義援金が送られてきます」と話している

▽ところで「対策本部」の活動だが、現在は大震災の事態を受けての緊急措置として、あくまでも臨時に対応しているため、本部課員も各部局との兼職で、予算措置も曖昧なため、奥邨内局では関東大震災規模の大規模災害等や国際救援等を想定して、宗務院規程を改正し、常設の機関とすることで検討を急いでいる。したがって現在の「対策本部」はこのままの形で、とりあえず年度内（三月末）は活動が続けるが、この規程が承認され次第、新たな機関で地震の復興に対処したいとしている。

臨黄

災害対策特別委設置提案

●妙心寺派 第八十七次定期宗議会は二十四日、上程された十八議案、九承認案を可決して閉会した。最終日は冒頭、花園高校の「家庭調書」問題（新入生に本籍、家族の職業、出身学校を明記した家庭調書の提出を求めていることにつき、差別を助長するものであるとの観点から問題提起された）に関する対応の中間報告が越智聡明校長から行なわれ、引き続き、家永重遠議員が災害対策に関する宗議会の宗務総長宛要望書（上野真讓議長名）を代表して読み上げた

▽要望書は災害対策の特別委員会設置提案を内容とするもの。「被災寺の復興に対する支援は長期にわたる持続的な方途が必要」としているが、宗議会二日目に家永議員や細川景一議員が行なった一般被災者、被災寺院支援などについての発言（本欄既報）を踏まえれば、兵庫県南部地震被災寺院に対する長期低利融資のための基金創設や本派ボランティア組織化の検討などが要望書には含意されている、とみてよからう

真宗

総合計画の見直しを要望

●本願寺派 第二百四十二回定期宗会（北條成之議長）の通告質問で、兵庫教区選出の菅義成議員（新和会）は、「これは私一人の考えではなく兵庫教区全体の切なる願いである」と、兵庫県南部地震で甚大な被害を受けた同教区内の阪神、淡路地区の寺院の復興支援のため積極的な行政措置を要望し、総額百九十八億円の予算が計上されている蓮如上人五百回遠忌の総合計画の抜本的な見直しを切望。また、総合計画予算の審議を付託された財務特別委員会（木南正直委員長）でも浅野弘毅議員（無所属）をはじめ多くの議員が同じように総合計画の見直しを求めており、二十五日の本会議で木南委員長は「この点につき委員から特に強い要望があったことを申し上げる」と報告した

▽松村了昌総長は、こうした要望には理解を示しつつも、行政責任者として規定方針の安易な変更はできない立場にあり、通告質問では「抜本的な見直しは難しい」「多くの人達から既に寄せられている懇志を所期の目的外に使用するのはいかがか」と答弁。復興支援策は第二百四十一回臨時宗会で設置をみた災害対策金庫を中心に据えて臨む方針を示し、「この金庫の原資を当初目標額の十五億円から五十億円、百億円へと増額することが大切。そのためには我々総局員が全国行脚をするなど最大限の努力をしたい」と決意のほどを述べた

▽しかし、総合計画の抜本改定には難色を示しつつも、同総長は、この中の御影堂の修復など建築関係の諸計画については「出納閉鎖までには補填が必要」との条件を付けた上で「この費用の一部を流用することも可能で、柔軟な対応を行ない得る余地もあるのではないかとし、総合計画の骨子は変えずに何とかその中身の“微調整”に活路を見いだせないかとの思案のほどをうかがわせた

▽確かに、四年間もの長い年月をかけて練りに練り上げて策定に漕ぎ着け、既に昨年一月から実働態勢に入っている総合計画を、ここにきて急遽変更するということは行政の立場からすれば事実上不可能に近いと言わざるを得ない。しかし、被災寺院の窮状を間近に見聞している兵庫教区内の住職らが「その不可能を可能にするのが政治」と言いたくなるのも当然といえば当然の心理

▽就任以来二年余り。この間、総合計画を策定、実働をはじめ連続して発生した差別問題や年金制度改定への対応など幾たびかの難局に遭遇し、その度に持ち前の“カミソリ”の切れ味を発揮してきた松村総長だが、幾十もの存亡の危機に瀕した被災寺院や門信徒の命運がかかる今回のケースはその中でも最大の試練といえ、その真価が問われている

▽先日、兵庫教区内の一住職が本紙への投書の中で「教学の振興や人材の育成は宗門として当然やるべきことでとさらに総合計画として取り組むべきことではない。御影堂修復は思い切った行政改革を断行することで充当し得

る範囲で良いのではないか。やたらと行議兼職の感じの強い複雑な機構を改めもっと簡素な宗務機構にすることこそ門末の要望である」とかなり厳しい調子で宗務機構の行革の必要性を訴えていたが、当局はこうした宗内の声にどう応えていくのだろうか。